

産禅洞だより

■ 岐阜環境医学研究所・産禅洞診療所
 ● 呼吸器疾患・禁煙治療・漢方相談
 診 察 日：月曜・木曜・金曜
 受付時間：9:00~12:00
 〒502-0017 岐阜市長良雄穂878-16
 IP Tel:058-295-9545
 FAX:058-296-3903
 E-mail:zazendoh@ccn.aitai.ne.jp
 http://zazendoh.town-web.net/

第118号 2014.1.1.
 毎月1回発行 産禅洞診療所 松井英介

立ち上がったお母さん



寒風に咲くマユミの花

松井英介

「・・・専門家だという人たちにはともに考えてほしい、・・・助けてくれるのではなく、一緒にこの事態を闘ってほしい」。福島県双葉郡富岡町から東京に避難した市村高志さんは、「自分たちのこれからを、ほかの誰かに勝手にきめられたくない」。仲間たちと「NPO法人 とみおか子ども未来ネットワーク」を創りました¹⁾。

岐阜県にも、放射線汚染地から890人（2013.6.20岐阜県災害救援対策本部調）が移り住んでいます。積極的なお母さんたちは、地元の人びととともに「原発知らない」行動をつづけながら、生活支援を求める活動や裁判の準備を始めています。岐阜に移り住んだために余分にかかる生活費や交通費を国に請求することをADR（裁判外紛争解決手続；Alternative Dispute Resolution）というそうです。

原発は国策でしたから、原発事故の被害は、東電だけでなく、日本政府が償わなければなりません。ところが政府はこのADRを今年3月11日で打ち切りにしようとしています。とんでもない話です。福島から移り住んできたお母さんたちが中心になって立ち上がったのです。岐阜の市民や弁護士が、名古屋の仲間と連携しながら、動き始めています。松本市では、「子ども留学」の準備が進められています。チェルノブイリの子どものために、優しい甲状腺外科手術を伝える活動に献身してきた菅谷昭さん（現松本市長）も積極的です。北アルプスをはさんでお隣の高山市とは姉妹都市。日本列島の真ん中から、新しい動きが全国に拡がろうとしています。

「人間は忘れっぽいものです。そのために、自分がこれまで受けた苦痛から次第に離れてゆくこともできるが、その忘れっぽさのために、前人のあやまちを再び同じように繰り返しかえすことも珍しくない。・・・その救済法としては各人が一冊のノートブックを買うことです」。これは、四日市の紡績工場で働く娘たちとともに「生活を記録する会」をつくり、後に四日市公害の記録を残し、今子どもたちに「語りべ」をしている沢井余志郎さんが、その著書の冒頭に引用した鲁迅の言葉です。「生活を記録する会」は集団の中で書き、書いたことを話し合うことをとおして、自分で考え、行動する、自立した人間になることをめざしました²⁾。沢井余志郎さんたちの闘いのその後は、次号で³⁾。

3・11以後の心と身体の記録を残そうと準備してきた「健康ノート」が、間もなく出版されます。子どもからおとなへ、一人ひとりが「自分」を記録することによって、「自らを客観的に観られるようになりたいものです」。

【参考文献】1) 山下祐介、市村高志、佐藤彰彦『人間なき復興 原発避難と国民の「不理解」をめぐる』(2013年) 明石書店、P.80, 303, 2) 沢井余志郎 鶴見和子・田尻宗昭序『くさい魚とぜんそくの証文 公害四日市の記録文集』(1984年) はる書房 P.10, 21, 22, 3) 沢井余志郎『ガリ切りの記 生活記録運動と四日市公害』(2012年) 影書房、P.236